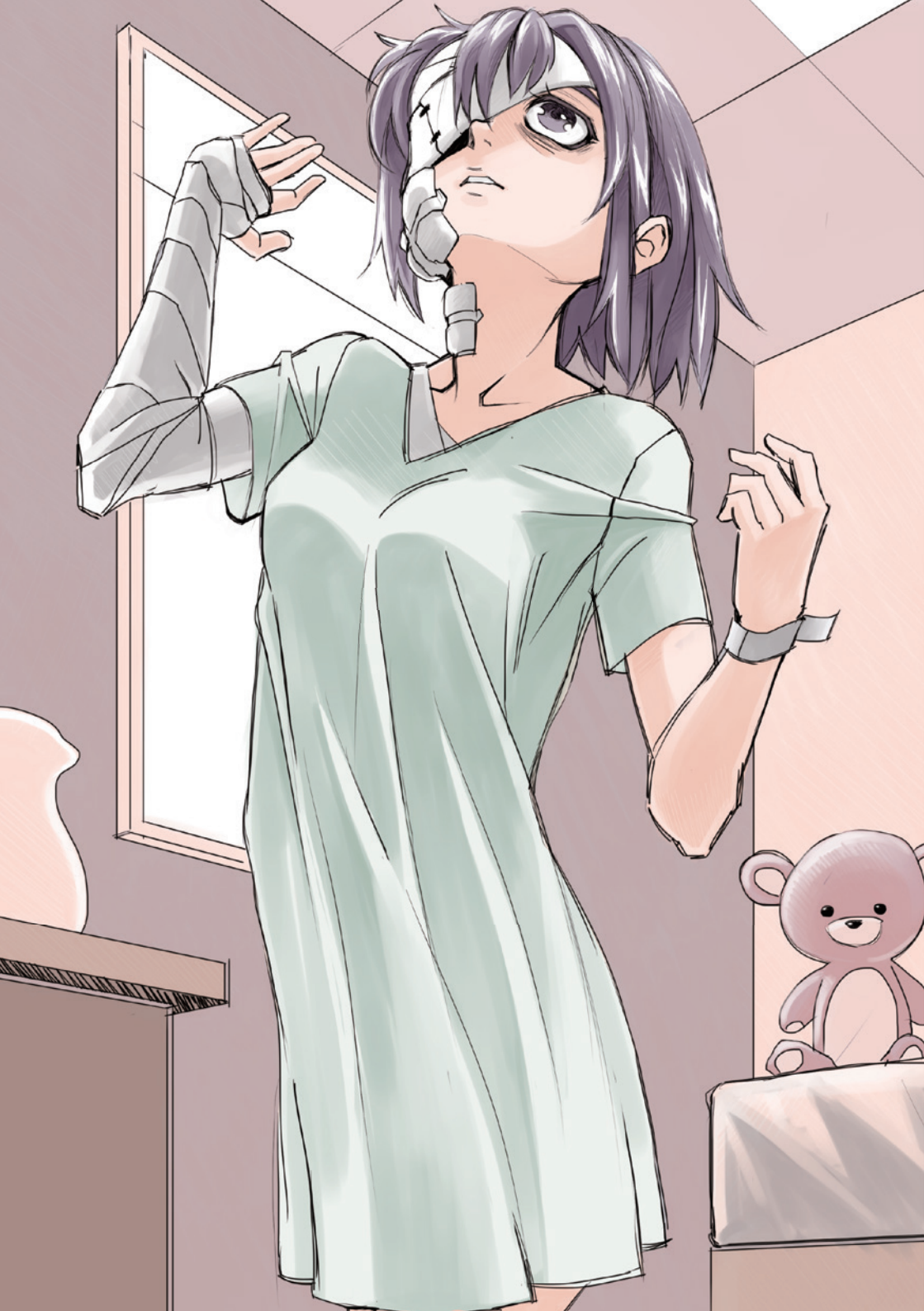


The past is prologue







Foreword

かたわ少女はもうすぐ6才になります。そして日本語版は2才半。しかし4LSの一部の面々は10年以上も付き合いを続けています。

KSリリース5周年となった今年、私たちは延々と当時のことを振り返っていました。もはや誰もが真っ先に頭に思い浮かべる作品ではなくなりましたが、今でも活気のあるファンコミュニティには元気づけられています。(少なくとも私はそうです) コミケも私にとっては思いをめぐらせる時間です。数日の間、誰もが日常の困難を忘れて、空想の世界へと身を隠せるのです。

この本のテーマを考えるにあたって、キャラクターたちの来し方にも思いを馳せてみようと思いました。私たちが出会う前の彼女たちはどんな人物だったのか。多くのファンフィクションや、私たちが仲間内で語るお話は、KSの物語のあとのできごとです。久夫が街にやってくる前の山久学園の様子を私たちが考えることはほとんどありません。そんな思いをきっかけに今回の小説を書き、そしてアーティストたちへのテーマとしました。

冬コミは夏コミからの期間が少々短いため、作品を集めるのが難しかったのですが、お楽しみいただければ幸いに思います。

私がこの小説を書いたこと、そして本を目当てに来てくれた皆さんとスペースで出会うのを楽しむのと同じくらい、みなさんがこの本を楽しんでいただけるとうれしいです！

— Cam "Cpl Crud" O'Neill

The past is prologue

2017/12/31 Comic Market 93

Duet

Scene 1

雨粒が窓枠を叩き、私の部屋に侵入しようとする無為な試みを続ける。その心地よい音は寮の部屋に流れる単調な背景ノイズをかき消して、私が手にしている本のページの感覚に集中させてくれる。一文字ずつ指を滑らせると、指先にその突起が柔らかく触れて、言葉が心の中で組み立てられていく。言葉とはどんなものなのだろう、と考えることがある。文字の模型を手にとったことはあるけど、さまざまな文字が集まって単語になるといのは想像するのが少し難しい。でも心配はない。読書という行為は想像することとほぼ同じことなのだから。視力のある私の友人たちだって、ドラゴンや外宇宙や深海を実際に見たことはない。私たちの想像力は、私たちの身の回りの世界に対する認識をもとにイメージを造り上げる。ある生き物がヒトよりも二倍大きいと言われたら、私も他の人と全く同じようにそれを理解できる。

そうして、私の指はページの上をたどり、夜が更けるにつれて残りページが少なくなっていくのを感じる。時が流れて時計が弱々しく音を立てるけど、なぜか読むのをやめられない。最後のページを味わうようになぞり終えると、本を机の上にそっと置く。その横には何時間か前に入れて、もうぬるくなった紅茶のカップ。こんなに熱心に本を読んだのは久しぶりだけど、いい気分だ。かなり前から読みたいと思っていた本だったのに、どういうわけかずっと後まわしにしていた。図書室の点字本

の品揃えは、晴眼者向けの本の総数に比べればそれほど幅広くはないけど、それでも一人では読み切れないくらいに多い。ときどき、この世界にあふれる膨大な数の創作物のことを思う。絵画はもちろん、本から音楽、映画に至るまで。

しばらく前に盲目の絵描きとのインタビューを聞いたことがある。彼の説明では、キャンバスの上に描線を浮き上がらせ、特別な技法で絵の具を混ぜて塗っているという。しかもすべて手探りだけで。彼の作品を見た人々にも、何か気づいたことはないかと尋ねていた。色使いについて意見を述べていたけど、作者が盲目と聞かされると驚いていた。でもベートーベンが聞こえなくても、その曲は現代にまで聞き継がれている。あるものを評価し称揚するか、それとも忘却されるに任せるかは聴衆が決めることだ。

手探りでベッドに向かい、まどろみに沈む。明日は新しい日、私の道程の次の一歩だ。でも盲目の画家の話の思い出し、頬が緩む。私たちは私たちでしかなく、誰しもそれぞれのやり方でその事実と折り合いをつける。自分でない何かになろうとするから、厄介ごとを招くことになる。自分に対して素直になれないなら、いったい誰に対して素直になれるというのだろうか？



目覚ましが早く鳴りすぎて、もう1時間は寝ていたいと思ってしまっけど、お構いなしに体を起こす。毎朝の決まった手順をひとつ抜かしてしまえば、それにつられて他のことを忘れる恐れがあるし、そうなれば大変なことになる。学校のある日は毎朝同じ段取りを踏むことを何年も続けてきたので、この体は線路の上を進む列車のように動く。でもひとつ手順を省略すれば全体に影響が及び、ばかばかしいミスにつながる。そして佐藤家にはかばかしいミスを犯すという悪評は存在しない——むしろ逆だ。なので、私は目覚ましを止め、読書のために夜更かししたことに悪態をつき、一日に向けて身を奮い立たせる。

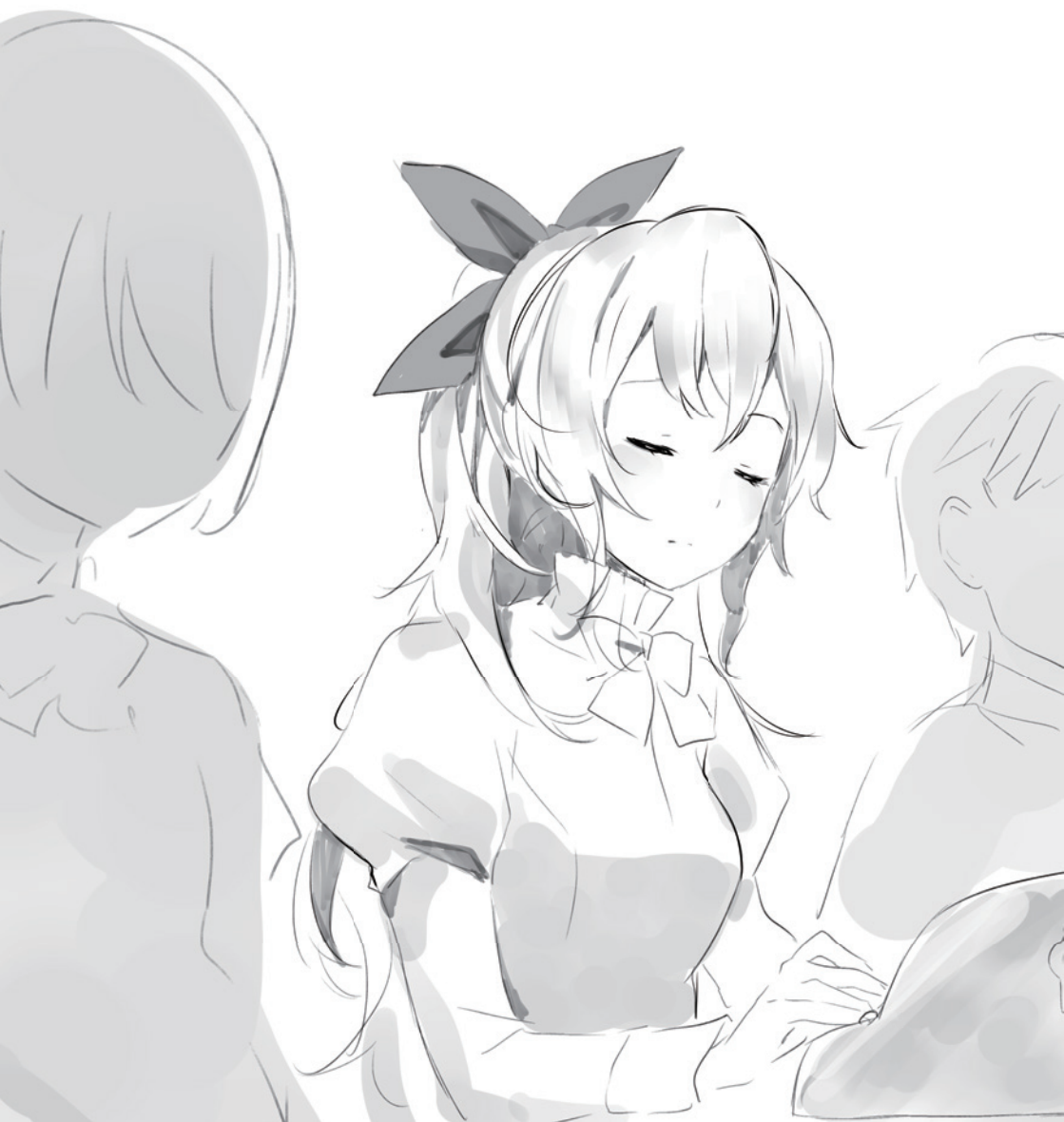


ほどなく、点字タイプライターのかちやかちやという音が耳に響き始める。昨夜の雨音に似ているけど金属質の音。先生が数式を読み上げると、皆が一斉にキーを叩く。一つ一つの指示の間に、先生がホワイトボードに板書をするかすかな摩擦音が聞こえる。タイプの音の合間には、隣の教室から伝わってくるくぐもった音が耳に、そして窓越しに入ってくる新鮮な初夏の風が鼻腔に伝わる。雨上がりの空気は、一ヶ月前よりもいくらかきれいになった気がする。まだ梅雨が始まったばかり。六月の雨はこれからの暑い季節の前触れだ。少なくとも今年の梅雨はおおむね穏やかで、時折晴れ間ものぞいている。

「さて、これで式の両辺が等しくなったが、誰かXとYの値を答えられるか？」先生が意気揚々と私たちに尋ねる。タイプライターのような機械の中を紙が進み、生徒たちが書き込みを読み取る。「肇、どうだ？」
「Xは4で、ゆえにYは18ですか？」肇はどこか自信なさそうに答える。

「その通りだ！」それよりも多少熱のこもった調子で、先生が応じる。私は一人笑顔を浮かべる。その答えには少し前にたどり着いていたからだ。連立方程式のこつがつかめてきたのかもしれない。

「基本的に、二変数の方程式が二つある場合、両辺を操作して変数を一つ消去することで解くことができる。実に簡単だな。今日はこのくらいにしておこう。たまには早く……」そう言い始めたとなんか昼休みのチャイムが鳴る。「努力はしたんだがな。ではまた明日」その言葉は板張りの床に椅子がこすれる音と、外の廊下にあふれ出た生徒たちの叫び声や歓声にかき消される。私はしばらく教室の中で待つ。チャイムが鳴った直後の混雑の中では、誰かに衝突してしまいかねない。それに私のランチ友達は、少し遅れたくらいでは——仮に気づいたとしても——気にしないだろう。



誰もいなくなつた廊下を歩きながら、私は杖の先端でゆっくりと床の上に弧を描く。摩擦の少ないプラスチックはほとんど音を発しない。活気に満ちた子供たちの遊ぶ声は、彼らが校舎の反対側に移動するにつれて小さくなる。芝生がまだ湿っているのにも構わずに、食事やおしゃべりや外遊びをするのだろう。それが不満というわけじゃない。草の匂いをかぐと、私たちを待ち受けている長い夏の日々が頭に浮かぶ。それは詩人たちが好んで耽溺するような、豊かなみずみずしさを運んでくるのだ。

ようやく私たちの部屋の扉にたどりつく。すでに華子の中にいるのが聞こえる。お昼ご飯を準備するかすかな物音が伝わってくる。華子は驚きやすい子だから、扉を開いたら手に持っているものを取り落とすしてしまうのではないかといつも心配になる。なので中に入る前には、あえてそつとノックをするようにしている。小さく息を呑む声が聞こえたけど、少なくとも食器が壊れるような音はしない。ティーセットは今日も無事ようだ。「華ちゃん、私よ」扉を開く前に、私は声をかける。

「リ、リリー……こんにちは……」華子はつかえながら答える。「お茶いれたよ……」そう付け加えると、カップをテーブルに置く。陶器のカチリという音が聞こえる。室内に入り、かばんを置いて扉を閉じると、ただよう紅茶の香りが鼻に届く。この部屋は校内で最も使われていない部屋だと思うけど、それでも時折通りがかる生徒はいる。この数年で、華子は自分の不安をコントロールするのがとても上手になった。ただそれはこの部屋という空間のおかげなのだろうか——侵入者をさえぎり、学校という外側を隔てる泡。誰かがこの部屋を見つけて、何かのために使い始めたとしたら、華子の状態も後戻りしてしまうかもしれない。なので扉は常に閉じている。鍵をかける方法を知っていたならそうしただろうけど、学校の中にいる以上そうはいかない。

「香りで分かるわ。ラプサンストーションみたい。父がこの前、出張のお土産にくれたの」私は答えに一言添える。中国の紅茶は父のお気に入りの一つだった。前回の出張で訪れたあと、これで自分を思い出して欲しい、と私に茶葉の缶を置いていった。私はここにいない家族のことを意識から追い出し、目の前にいる友人と、ごろごろと鳴る胃袋に集中しようとする。少なくともこの紅茶で午後をしのぐことはできるだ

ろう。カフェインは昨日の寝不足分の埋め合わせになる。華子に自分の睡眠パターンを気取られないよう、私はできるだけ頭を高く上げる。

「そ、そうだよ」華子が答える。でも予想が特に難しいわけではない。あの煙たい茶は間違えようがない。「じゃあ冷めないうちにいただきますでしょうか！」椅子につき、空元気を出しながら声をかける。華子がカップに茶を注ぐ。私はかばんの中を探り、自分の昼食——サンドイッチを取り出す。時間を取ってももう少し腹持ちのいい物を用意するべきだったと思うけど、やむを得ない犠牲だ。「勧めてくれた本、読み終わってたわ」テーブルの上にサンドイッチを広げながら、言葉を継ぐ。

「あ、ああ……う、歌うふ、船？ どう、だった……？」そう尋ねる華子の声は徐々に上ずっていく。

「内容も仕掛けも面白かったわ。コンピュータじゃなくて、人間の脳が宇宙船を動かすというアイデアは面白いと思う。どうしてか、そうすることにより……人間らしくなっている気がして」自分の考えを伝えようと、苦労して言葉を探す。「でも、同じ作者のドラゴンの本の方が好きかもと思ったわ。殻シェルに入った人間になるのは、あまりいい気分ではなさそうだから」本の内容は確かに面白かったけど、もし現実がその通りになっていたら、この学校の生徒のほとんどは自分自身の人生を過ごす代わりに、生けるコンピュータに改造されるだろう。そんな恐ろしい考えを華子には話したくはなかった。

「私……私、か、悲しいと思ったけど……でもなんだか、ハッピーエンドでもあると思って」紅茶を飲みながら、華子が言う

「そうね。船のパイロットが死ぬのは悲劇的だった。でも死は私たち誰もが向き合わないといけないものだから」私は答える。「少なくとも二人は絆を結ぶことができた。大事なのはそこだと思うの」

「う、うん」華子の声に、先ほどよりも力強さを感じられる。その顔に笑顔が浮かんでいればいいなと思う。

こうしたひとときを重ねることで私たちは友達になった。最初のうちは、華子は一人きりになりたいのだと思っていた。でも図書室でばったり出会って、お互いに本の好みが似ていることを知った。彼女はもつと他の人たちに交わりたいたいと思っているのに、何かの理由で踏み出せずにいた。華子の中には、他者に受け入れてもらいたいと切実な願いがあった。そして、外側の世界が自分を傷つけようとしていると怯えている別の人格がそれを包み込んでいた。だから華子は本のページの中に居場所を求めて、フィクションの世界に引きこもった。でも私との距離が近づくにつれて、華子は変わり始めた。まだ社交的になったとは言えないにせよ、少なくとも以前よりは自分の気持ちを進んで話してくれるようになった。進歩ではあるけど、あとたった9ヶ月で学校が終わってしまふことを考えると、華子が自ら造り上げた殻を抜け出せるようになる前に、時間切れになつて山久の隔離された環境を離れることになりはしないかと心配になる。

「それで、次は何を読むの？」そう尋ねながら、手で目の前に置いたサンドイッチを探し、一切れ取つて口に運ぶ。

「あ、あの、本があるの……少年がボ、ボートに乗つて……と、虎と……」華子が答える。

「虎？　なんだかファンタジーみたいね……」

「そ、それよりは……ど、ドラマかな」返事がまたつかえる。「で、でも、面白そう……」

「そうね。優子さんに一冊仕入れてもらおうようお願いしないと。たぶん入るまでには時間がかかつてしまふから。本の名前はなんて言うの？」

「は、パイの物語……」

「わかったわ。楽しみね！」努めて明るく答えはするけど、本を読む速さは華子のほうがずっと速いし、本を注文してから届くまでにかかる時間も悩みの種だ。忘れずに図書室に行つて、『歌う船』を返却して

からこの新しい本を注文しておかないと。

たくさんの人が華子を哀れみ、腫れ物に触れるかのように扱う。でも華子本人はそんな扱いを必要としない。彼女に必要なのは、話しかけてくれる人、同じ関心事を分かち合える人だ……言い換えれば、友達。でも自分で築き上げた囲いの中心に自分自身を置き、他者が近づくことさえ容易ではないなかで、本人がその必要に気づくことは難しい。だから私はこの小部屋で、華子と二人きりで過ごす。そしてそれと、絶え間なく彼女を引っ張り続ける。日に日に華子は距離を縮め、抱いていた恐れを捨てて、心の奥底でそうありたいと願っていた女の子の姿へと花開こうとしている。

「この紅茶、本当に美味しいわ。美味しく入れるのは難しいと思ったけど、うまくできたのね」実際、その通りだ。煙の香りはちょうど良い具合だけど、苦みは出ていない。正確に時間が計れていたということだ。「あ、ありがとう」答える華子の声が明るい。「私、時間がだ、大事って、し、知ってたから」

華子に公平を期するために言うと、私だってそれほど社交的というわけではないし、家庭内の事情も助けにはならない。そのなさを常に求められるプレッシャーから逃れて、社会から切り離された部屋に閉じこもるという発想は、確かに魅力的だ。だから私はここに来るのかもしれない——これは私なりの逃避なのだろうか。人里離れた丘の上の、隔離された茶室……ここでは何事もそのまま、変化することはない。

「ええ……そうね。本当に。でもうまくできたわ。ありがとう」

「ど、どういたしまして」

Contributors

1

moekki
@eoodling

kamifish
@kamifish

Cover

Illustration

3

climatic
@not_climatic

4

Illustration

konflikti
@konflikti

Story

7

cpl_crud
cplcrud.wordpress.com

9

11

13

Illustration

raemz
pixiv.net/raemz

Design

0

Aura
@enneuni

From the editors

かたわ少女のことを初めて知ったのが2008年なので、もうすぐ10年になります。自分の人生の少なからぬ分量をKSに捧げたのだと思うと、感慨深いです。

『過去のヒロインたち』というテーマはいかがだったでしょうか。個人的にはピンク髪になる前のミーシャがとても気になります……

ささやかな本になりましたが、楽しんでいただければ幸いです。

— hir

Four Leaf Studios

①
@fourleafstudios
@ksjproject



②
www.katawa-shoujo.com
katawashoujo.blogspot.com
katawashoujo-ja.blogspot.com

③
ksjproject@gmail.com





four leaf studios

45

2017